

# 大友氏の歴代墳墓を巡る (六)

七代氏泰・八代氏時

古藤田

太

(会員・弥生町江良)

## 第七代 大友氏泰

(高野山文書)

法名 同慈寺殿独峰清巍公禪師

康安二年十一月三日逝

備考

死亡年月日については大日本史料では正平十七年(一一三六二)十一月三日、公方様当家条々要目では康安二年(一一三六二)霜月三日、志賀文書では正慶二年(一一三三三)十一月三日となっている。

墓所 大分市大分銀行本社敷地内(現存せず)

元弘三年(一一三三三)十二月三日大友貞宗が京都で急逝したが、大友第七代家督となったのは兄達をおいて、まだ幼少千代松、後の氏泰であった。時代は恰も鎌倉幕

府滅亡直後で、武家、公家の次期政権をめぐる対決は熾烈<sup>な</sup>をきわむるものがあった。

父貞宗の死の直後、北条氏の一族規矩高政と、糸田貞義の反乱が筑前で起ると、兄貞載は少式頼尚等と共にこれを平定した。この功績で肥前国の守護に任ぜられたが、代官を遣って自らは千代松丸の後見に当った。

翌年建武二年(一一三三五)七月、鎌倉幕府の再興を願う北条時行が鎌倉で挙兵して、足利直義を敗走させた。

この為、天皇は新田義貞に尊氏討伐を命じた。この新田軍に大友氏も下命を受けて従軍したが、十二月十一日箱根竹の下で足利軍主力と対決したとき、突然大友貞載や千代松丸が足利軍に寝返ったことから、新田軍は総崩れとなり、後醍醐天皇は比叡山に逃れた。戦の直後、戦勝者の大友貞載は不意に襲われて戦死する事件が勃発した。

千代松丸にとって強力な後見人を失った大事件であったが、これに代ってやがて足利尊氏の九州落ちの際、千代松丸と猶子縁組みを結んで、千代松丸の後見に乗り出して呉れたことは幸運というべきか、かくて尊氏と大友氏は手堅く結ぶことになった。建武三年（一三三六）元服の千代松丸は尊氏の氏の一字を貰って氏泰と名乗った。

尊氏は九州に落ちて、多々良浜の大勝以来急速に味方の軍勢を集め、一方で南軍討伐を行うと共に、尊氏は京都に攻めのぼって行った。この時尊氏は、氏泰を九州にとどめ、氏泰に代って出羽泰貞が大友一族をひきいて従軍した。この大友一族を角達一揆と呼ぶが、角達一揆の恩賞に佐伯荘を与えている。それは佐伯氏第八代惟秀の娘が、南軍の大將菊池氏に嫁している関係もあって南軍側についたものであろう。その後この問題はどうか処理されたものか、全く不明のままとなっている。

南軍についたのは佐伯氏ばかりでなく、せっかく父貞宗の遺言がありながら、次の大友家督にありつけなかった氏宗は、氏泰が家督を氏時に譲った時分から南軍側について働いたものである。

尊氏は南軍討伐を氏泰に命じたが、氏泰はあまり積極

的に動かなかつた。当時大友輩下には人を得ていて、詫磨、志賀、田原氏等が大いに活躍したからである。この南北朝争乱期は才能ある氏族の発展期であった。田原氏のごときは、三代直貞、貞広、氏能とすぐれた武將が続いて大きく成長した。尊氏も九州のことについては、氏泰よりも直貞に相談を持ちかける程信頼したといわれる。氏泰が豊前国守護となったのは観応三年（一三五二）五月以前のことらしい。氏泰は貞和四年（一三四八）八月、異母弟氏宗をおいて氏時に家督を譲った。家督を譲って隠居の身となったとはいえ、氏泰は尊氏の信任が篤く当分は引続いて政治をみたようである。

氏泰が死去したのは尊氏の死後四年目、貞治元年（一三六二）（康安二）十一月のことであった。享年四二才。

氏泰は信仰心篤く、建武四年（一三三七）中岩円月和尚を大友氏の先祖墓のある鎌倉藤谷に招き、ここに住ませ、暦応二年（一三三九）父貞宗の供養のために利根庄に吉祥寺を建て円月和尚を開墓とした。

信仰心が篤いのは、五代貞親、六代貞宗と父祖の代より続いている。しかもそれは禅宗の外護者であった。

臨済宗開祖栄西は二度にわたり入宋して、建久二年

(一一一九一) 帰朝後、博多を中心に布教し、香椎に報恩寺、肥前に恵光寺を開いた。

豊前、豊後の地は当時天台宗の勢力が強く、禅宗の浸透がかなり遅れたのであるが、鎌倉末期になって大友貞親、貞宗の力強い支援を得て布教されたものである。禅宗が始めから単純なたちで受け入れられたものではない。



八代大友氏時墓

く、旧仏教との習合というかたち、神道特に宇佐神宮との結びつきで浸透してきたもので、純粋な禅宗が広まってゆくのはかなり遅れたものである。貞親、貞宗と禅宗との関係については

前回まで多少触れたので最後に、大友氏の建てた豊後の禅宗寺院をあげておこう。

万寿寺(府内)徳治元年(一一三〇六) 大友貞親

東巖寺(鶴崎)元亨年間(一一三二―一一四二) 大友貞親

長興寺(戸次荘) 大友貞親

同慈寺(府内)元応元年(一一三二) 南禅大同禅師 大友氏泰

竜興寺(鶴崎)延文三年(一一三五八) 大友氏泰

大応寺(阿南郷)暦応中(一一三三―一一四二) 大友氏時

竜祥寺(向ノ原)応安三年(一一三七〇) 放牛禅師 大友氏時

福田寺(植田郷)暦応四年(一一三四一) 大友氏時

大慧寺(府内)嘉慶元年(一一三八七) (大智寺) 大友親著

宝生寺(緒方郷)宝徳二年(一一四五〇) 大友親隆

西光寺(植田郷)再興 大友親隆

心源寺(臼杵荘) 大友政親

海蔵寺(臼杵荘)元弘二年(一一三三二) 開基要翁 大友氏泰

※海蔵寺については大友家文書録に記載あれども、年次については些か疑問あり。

## 第八代 大友氏時

法名 大應寺殿神州天祐大禪定門

応安元年三月廿一日逝

従五位上守刑部太輔氏時

墓所 大分郡庄内町大應寺

大友氏時が、兄の氏泰から八代の家督を譲られたのは貞和四年（一三四八）氏泰二十八才の時である。氏時は武勇の人と伝えられているが、氏時が活躍するのは氏泰死去の前後からである。

貞和五年（一三四九）足利尊氏の幕政内部では内紛が起きて、尊氏、直義兄弟の殺し合い、高師直（こうのちのらよ）の失脚、尊氏の私生子直冬の九州での活躍と相ついで情勢の変化が起った。そのうち、尊氏、氏泰という時代の寵児もこの世から没して、新たに氏時と二代將軍義詮が登場する時代となって、延文四年（一三五九）六月、氏時は肥後国の守護、ついで貞治二年（一三六三）九月、筑後国の守護にも任せられた。

直冬の九州下降によって、直冬に従う者もあって九州

の北軍は二分されて弱体し、そのため南軍勢力が強大となり、氏時すら一時南軍に降伏する有様であった。しかし、氏時の活躍によって北軍の勢力を辛うじて持ちこたえ、やがて勢力の挽回をはかることができた。このため氏時は、義詮の信頼をかちとり、恩賞としての所領、所職もふえ、所領にいたっては、豊後、豊前以下十一ヶ国、六十七ヶ所にのぼった。

氏時が死去したのは応安元年（一三六八）三月、阿南郷即ち今の庄内町に氏時の無縫塔の墓が残されている。

別府乙原の吉祥寺に、文和四年（一三五三）二月、三世供養のためとして宝篋印塔が建てられたが、「大友氏時の塔」としてラクテンチ内に現存している。

（つづく）

